

令和 5 年 5 月 19 日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12140

研究課題名(和文) 看護学生の異文化感受性を発達させる国際看護学モデルカリキュラムの構築

研究課題名(英文) Development of a global nursing curriculum model for the development of cultural sensitivity in nursing students

研究代表者

田中 博子 (Tanaka, Hiroko)

創価大学・看護学部・准教授

研究者番号：50279791

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：まず、Rogersの方法を用い「医療者のCS」の概念分析を行った。その結果、4つの属性4つの先行要件、3つの対象者の帰結、3つの医療者の帰結を導き、本概念を定義した。次に概念分析をもとに「医療者のCS」尺度の開発を行い、医療者と医療系学生の両者に使用可能な4因子18項目の尺度を開発した。最後に医療系学生を対象に、「医療者のCS」の関連要因を明らかにするために量的横断的調査を実施した。その結果、個人要因として外国人医療への関心度、大学の異文化接触環境要因として大学種別(単科・医療系・総合大学など)が関連することが明らかになった。国際看護系科目の受講の有無は、CS得点とは関連は示されなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、今後の多文化社会を見据え、異文化を有する対象者のケアに必須となる医療者の異文化ケア能力の基盤であるCultural Sensitivityを測定する「医療者のCS」尺度を開発した。医療者のCSは、医療系学生の段階から育まれるべきものであることから、医療系学生にも使用できる尺度を作成した。本尺度は異文化医療や看護に関する授業・演習等を設計する際の対象学生のレディネスの把握に用いることができる。また、多くの大学で実施されている海外研修の効果を、医療者として備えるべきCSの観点から研修効果を客観的に把握できることから、教育者や研修運営者がプログラム評価に有用である。

研究成果の概要(英文)：First, a conceptual analysis of "CS of healthcare professionals" was conducted

using Rogers' method. As a result, four attributes, four antecedents, three subject's consequences, and three provider's consequences were derived, and the concept was defined. Next, based on the conceptual analysis, the "CS of healthcare professionals" scale, which consists of 18-item with 4 factors that can be used by both healthcare professionals and college students was developed.

Finally, a quantitative cross-sectional survey of college students was performed to identify the factors associated with "CS of healthcare professionals". The findings revealed that the level of interest in healthcare for foreigners as an individual factor and the type of university (amalgamated college or university etc) as a factor of the intercultural environment of the education were related. However, participation in global nursing courses was not associated with students' CS scores.

研究分野：看護学

キーワード：Cultural Sensitivity 看護学生 尺度開発 国際看護学 関連要因

## 1. 研究開始当初の背景

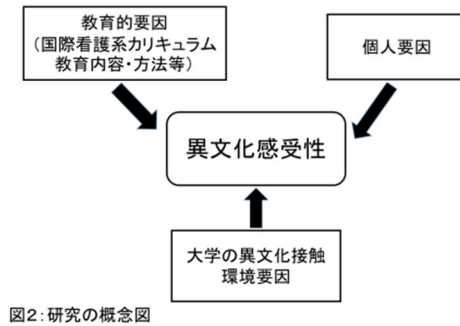
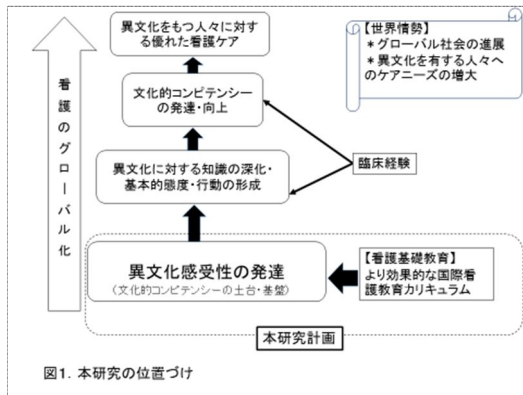
世界のグローバル化とともに訪日外国人および在留外国人数は増加の一途をたどっている。1990年代から、医療機関では外国人患者の診療において課題が挙げられていた。先行研究から、1990年～2000年代の医療機関の受け入れ体制としては、健康保険未加入者が一定割合存在するため外国人患者の受け入れに消極的になりやすいこと、言語の違いによる意思疎通困難の問題が示されていた。

最近の調査では、外国人患者が日本の医療機関の受診の際に文化的背景が注目されないこと、言葉の違いにより、自分の病状や主張を正しく伝えるのが難しい等の経験<sup>15)</sup>や診察時のプライバシーへの配慮の不足、医療についての文化的価値観の相違からくる誤解、言語の壁などの経験<sup>16)</sup>が報告されていた。留学生の外来受診経験を対象にした研究<sup>17)</sup>では、プライバシーが守られることや受診過程がスムーズ等の出身国との違いを良い点として挙げつつも、最も困った経験として医療者との意志疎通の困難さを挙げている。これらの外国人患者の受診経験から、言葉が通じないことに最も困難を感じ、また文化的な価値観の違いから医療サービスに不満足感を抱いていることが伺える。

一方、医療者側は外国人へ医療ケアを提供する際に、どのような戸惑いや困難を感じているだろうか。長谷川ら<sup>18)</sup>によると、看護師は外国人患者に対し言語、文化の違い、生活習慣の違い、病気の考え方の違いに不安を感じ、外国人患者に対し否定的感情を抱くことが多いことを挙げ異文化看護の研修の必要性を述べている。二見ら<sup>19)</sup>は、外国人患者受け入れ環境整備事業拠点病院で働く看護師を対象とした調査において、文化的背景、言葉の壁のため、検査や看護ケアの説明が十分ではなく、外国人患者に理解されていないまま実施されているという課題を明らかにした。杉浦<sup>20)</sup>は、外国人への看護経験が豊富な看護師は、文化を考慮したケアの重要性を認識していることを明らかにした。また、外国での生活経験を有する医師は英語での会話に抵抗感が少なく、外国人患者を診察しようとする意欲につながるとの報告<sup>21)</sup>もあった。

対象者の文化を考慮したケア能力は、文化的コンピテンシー(Cultural Competence, 以下CCとする)と呼ばれる。一方、Cultural Sensitivity(異文化感受性, 以下CSとする)も重要な能力であり<sup>30)</sup>、「CSはCCの発達の土台」<sup>31)</sup>と理解されている。また、CC尺度のシステムティックレビューをしたLinら<sup>32)</sup>は、近年の研究においてCSはCCを構成する要素と認識されていると述べている。

日本でも、医療者および医療系学生のCSを高めることは、異文化を有する外国人へのケアが日常化した昨今の医療現場において、対象者を尊重し、患者満足度を高める医療実践として重要なことである。今後、医療者の卒後研修や医療職学士課程教育において、CSを高めるための講義・演習・研修プログラムは一層必要となるものと考えられる。日本では看護系大学数の持続的増加のなか、学士課程において世界のグローバル化に対応するための、文化的コンピテンシー向上の土台かつ基盤であるCSを発達させる国際看護学系科目の教育方略の検討が必須であると考えられる(図1)。



## 2. 研究の目的

本研究は、看護学生の Cultural Sensitivity の実態を明らかにするとともに、国際看護学教育カリキュラム上の影響要因を明らかにし、Cultural Sensitivity を発達させる国際看護学モデルカリキュラムの考案・提示を目的とする。(図2)

## 3. 研究の方法

### (1) 「医療者の Cultural Sensitivity」の概念分析

Rogers の概念分析法にて、和論文 4 件、英論文 40 件を対象に、先行要件・属性・帰結を抽出

- 「医療者の CS」の 5 つの属性を決定
- 「医療者の CS」の定義を作成

### (2) 「医療者の CS」尺度の開発と信頼性・妥当性の検討

尺度原案の作成

- 先行文献より質問項目プールを作成
- 国際保健・国際看護専門家による内容妥当性の検討
- 看護系大学教員へのプレテストによる表面妥当性の検討
- 「医療者の CS」尺度の開発と信頼性・妥当性の検討
- 医療者 259 名、医療系学生 700 名を対象とした探索的因子分析
- 医療者 256 名、医療系学生 622 名を対象とした確認的因子分析
- 医療者・医療系学生の共通モデルの検討
- 共通モデルの内的整合性、構成概念妥当性、基準関連妥当性の検討
- 多母集団分析による等質性および因子平均の検討

再テスト法による信頼性の検討

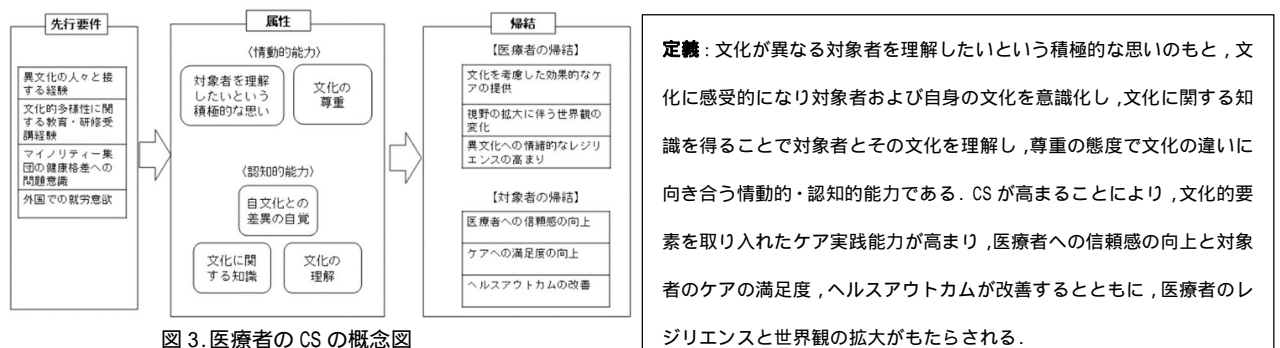
- 医療者 132 名、医療系学生 107 名を対象に級内相関係数の検討
- 基準関連妥当性、構成概念妥当性の検討

### (3) 全国の看護学生 310 名を対象とした「医療者の CS」の関連要因の検討

インターネットを用いた横断的量的調査による関連要因の分析  
(当初の予定から一部変更)

## 4. 研究成果

### (1) 概念分析により「医療者の CS」の概念を定義し概念図を作成した(図3)



## (2) 「医療者のCS」尺度の開発と信頼性・妥当性の検討

### 探索的因子分析 (EFA)

37 項目の尺度原案に対し、EFA を実施した。医療者は 4 因子 26 項目に、医療系学生は 4 因子 32 項目に収束した。

### 確認的因子分析 (CFA)

医療者と医療系学生の EFA 結果に対しそれぞれ CFA を実施し、共通モデルを作成した (図 4)

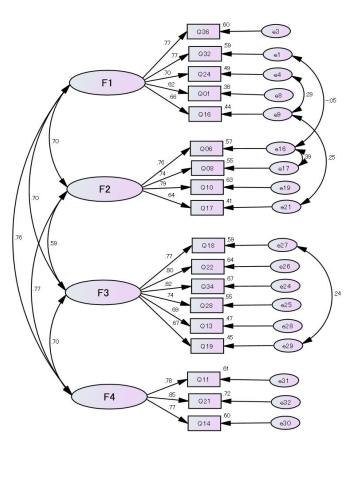


図 4 「医療者のCS」医療者と医療系学生の共通モデル

再テスト信頼性では、医療者は  $r=0.642$  (95%IC:0.530-0.732)、医療系学生は  $r=0.722$  (95%IC:0.618-0.802) と一定の再現性が確認された。

2 つの基準尺度を用いて基準関連妥当性を、先行要件を用い構成概念妥当性の検討を行った結果、妥当性が確認された。

## (3) 全国の看護系大学生を対象とした「医療者のCS」の関連要因の検討

当初の計画では、CS 尺度を用い数校の調査対象大学の看護大学生の縦断的調査を実施し、CS の発達と国際看護カリキュラムの調査を行う予定であった。しかし、Covid-19 パンデミックにより、学生は自宅でのオンライン学習方法に変更となり、質問紙調査自体が困難となった。さらに各大学の倫理審査も中断・延期している状況にあったため、当初計画していた紙面による縦断調査から、インターネットを用いた横断調査へ切り替えた (2023 年 2 月に実施)。インターネットによる横断調査では、個人情報の観点から在籍大学の収集は断念した。基本属性や CS に関連する国際看護学教育や大学環境に関する質問項目を設けたが、学生の在籍大学の国際看護カリキュラムを HP から調べることはできなくなった。

このような諸事情のもと、「医療者のCS」の関連要因の検討を行った。統計的分析方法は、記述統計、マンホイットニーの U 検定、クラスカル・ウォリス検定、スピアマンの相関係数を求め、有意水準は 5% とした。

国際看護系科目の受講経験割合は全体の 28.7% で、4 年次 (n=67) でも 35 名 (52.2%) が未受講であり、海外研修受講経験のある者は 20 名 (6.5%) であった。学年、海外生活 1 年以上の経験歴、外国語能力、海外研修参加歴、外国人と接する課外活動の有無、国際看護系科目の受講の有無、外国人留学生の有無と、CS 尺度得点には関連はみられなかった。大学種別では、総合大学 (n=153) や医療系大学 (n=105) など複数学部を有する大学と看護系単科大学 (n=49) の間で CS 得点に有意差があり、看護系単科大学が低い傾向にあった。また、個人要因である外国人医療への関心度と CS 得点には弱い相関がみられた ( $r=0.274$ )。国際看護系科目受講や海外研修経験、大学での異文化接触環境 (留学生との交流など) と CS 得点に関連性が見いだせなかったことは、Covid-19 パンデミックによる授業形態の変更や大学内での課外活動の自粛による多文化を背景にもつ学生 (留学生など) との交流機会の減少、海外研修やスタディツアーの中止の影響等もあるものと推測され、今回の調査から大学の教育的環境要因と CS 得点との関連を検討するには限界があった。また、卒業間近の 4 年次でも国際看護系科目未受講者の割合が半数近くいるということは、国際看護を学ぶ必要性の認識が十分ではないことを示唆している。今後は、平時での教育活動・課外活動の中で、どのように看護学生の CS が発達していくかを縦断的調査で明らかにしていくことが課題と考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Tanaka Hiroko, Arakida Mikako	4. 巻 39
2. 論文標題 Concept Analysis of Cultural Sensitivity in Healthcare Professionals	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Japan Academy of Nursing Science	6. 最初と最後の頁 221 ~ 226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5630/jans.39.221	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田中博子
2. 発表標題 LTDの国際看護学授業への導入の評価
3. 学会等名 日本看護科学学会第38回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中博子
2. 発表標題 医療職者の異文化感受性に関する文献レビュー
3. 学会等名 第32回日本国際保健医療学会（グローバルヘルス合同学会17）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田中博子、荒木田美香子
2. 発表標題 「医療者のCultural Sensitivity」尺度得点の職種・学科別分析
3. 学会等名 日本看護科学学会第42回学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------